

光る研究を下支えし 国の研究力を高めていく

文部科学省 研究振興局 ライフサイエンス課 課長

釜井 宏行 様



群馬大学未来先端研究機構のウイルスベクター開発研究センター5周年記念シンポジウム開催にあたり、ひとことお祝いの言葉を申し上げます。

私がライフサイエンス課長に就任したのは今年の7月でございます。以前にこの課の課長補佐を経験しております。ちょうど新型コロナウイルス感染症が広がり始めたところで、上山先生はこの対策、G7対応などをご尽力されておられたところでした。その後、私はAMED(国立研究開発法人日本医療研究開発機構)に行き、2年間、創薬研究ですとか「ムーンショット型研究開発事業」の立ち上げなどをやってきたところでございます。

◎ 重要な地域の視点

地方国立大学の研究は、ライフサイエンスにおきましても、地域の視点というのは非常に重要だと思っております。文科省内で私どもライフサイエンス課のカウンターパートは医学教育課になるんですが、これらの立場から大学の生命科学系の研究を見ますと、地域の大学にきらりと光る研究があり、そうした研究を下支えし、大学の研究経営を支援することによって国全体の研究力を高めていくのが私ども研究振興局のミッションだと考えております。

そういった中で、群馬大学さんが5年前にウイルスベクターに特化したセンターを設立して研究開発を推進してきたことは先駆的でありましたし、研究開発の成果を着実に積み上げてきたことは意義のあることだと思います。

◎ 一層の産学官連携が大事

本年度は、国の第2期の健康医療戦略の最終年度です。この戦略の中では、モダリティ等を軸とした6つの統合プロジェクトが定められていて、「再生・細胞医療・遺伝子治療プロジェクト」はその一つです。遺伝子治療の位置づけは、来年度からの第3期健康医療戦略でも引き継がれると思いますが、一層、産学官の連携が大事になると思います。

脳科学研究には群馬大学にご尽力いただいています。国の複数の大型脳研究プロジェクトを発展的に改組する形で、令和6年度に、AMEDの事業でございますけれども、脳神経科学統合プログラムというものを創設し推進しております。

ウイルスベクターがないと遺伝子への薬剤等の送達できませんから、脳神経科学とウイルスベクター研究開発は融合が重要です。群馬大学の取り組みは非常に意義のあるものだと認識しております。

本日の上山先生、平井先生、畑田先生の講演、パネルディスカッションを心から楽しみにしております。最後になりましたが、シンポジウム開催に向けて準備をされてきた関係の皆様にご敬意を表します。今日はお招きくださりましてありがとうございました。